

【学術変革領域研究（A）】

区分 I



研究領域名 中国文明起源解明の新・考古学イニシアティブ

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

なかむら しんいち
中村 慎一

領域番号： 20A103 研究者番号：80237403

【本研究領域の目的】

本研究領域の目的は、新石器時代晩期（紀元前3千年紀後半）の中国に勃興した諸地方文明がやがて黄河中流域へと収斂し、青銅器時代初期（紀元前2千年紀前半）には中国文明として開花する過程を解明することにある。

具体的には、①中国文明形成期において文化的ハイブリディティが果たした役割の究明、②モノの移動の背後にあるヒトの移動の集団・個人レベルでの復元、③初期中国文明の外來要素とプロト・シルクロードの実態解明、の3点が中心的課題である。

これらの目標の達成によって、従来の中国文化論・文明論に刷新を迫り、今後の人類文明の在るべき姿を考える上で“中国四千年の歴史”とも称される中国文明が持つ強靱なレジリアンスの有効性について提言を行い、文理の関連諸科学に考古学の横串を通すことで新たな学問領域を創出する。

【本研究領域の内容】

中国文明起源解明のための考古学の新規戦略（＝イニシアティブ）を提示し、その実践を通じて、中国考古学の長年の懸案と新たな課題を一挙に解決しようとする試みである。具体的には、目に見えるモノから歴史を再構する考古学と、そのモノから目に見えない情報を引き出す考古科学とが対等な立場で協働し、文明形成期の中国における各種威信材の産地及び流通ルートの復元とヒトの移動復元を併せ行う。対象とする威信材は玉器、トルコ石、タカラガイ、ワニ革太鼓、象牙、漆器、特殊土器、水銀朱などである。ヒトの移動については、殉死人骨や供儀人骨など、尋常でない最期を遂げた人骨を主に扱い、その来歴を探る。また、中国文明形成期における西方からのインパクトとその伝播ルートとしてのプロト・シルクロードについて多方面から検討を加え、その実態を解明する。

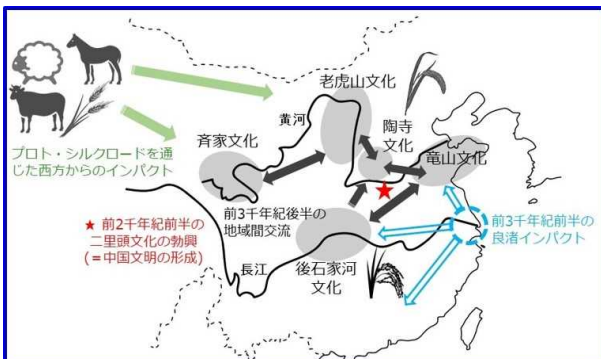


図1 中国文明形成の概念図

【期待される成果と意義】

いわゆる世界四大文明のうち今日まで命脈を保っているのは中国文明のみである。もとより、中国においても洪水などの自然災害はしばしば猛威を振るい、また、大規模な戦乱が絶えず人民を苦しめてきた。それでも、中国文明は途絶えることはなかった。黄河流域の麦作（新石器時代までは雑穀作）、長江流域の稲作、そして西・北方草原地帯の牧畜という、中国文明を特徴付ける生業面での「多重構造」こそが、その強靱なレジリアンスの源泉ではないかと想定される。そうした中国文明の「多重構造」がいかんにして形成されたか、その結果、中国文明はメソポタミア、エジプト、インダスといった旧大陸の初期文明やマヤやインカといった新大陸の諸文明とどのように異なる特質を獲得するに至ったのかを明らかにし、世界各地における文明誕生プロセスの多様な在り方について新たな知見を提示する。

中国において青銅器文明が誕生したのは、新石器時代晩期の地方文明の空白地帯であったと言える現在の河南省である。それは、辺境が中心に転化する過程と言い換えることもできる。そこにはヒト・モノ・情報の融合、すなわち文化的ハイブリディティの獲得が大きく作用しているに違いない。そうであるとすれば、生物学の「雑種強勢」のアナロジーが当てはまる。

その際、中国内の各地方文明の融合ばかりでなく、中国外部、特に中央アジアを経由して、遠くメソポタミア文明、あるいはインダス文明に淵源を辿ることのできる文明要素（ムギ、ウシ・ウマ・ヒツジ、青銅器、馬車等）が伝来した可能性が高いことはこれまで中国考古学では十分に議論されてはこなかった。現代の政治・宗教・民族問題などに規制されることなく、中国史を人類史の中に正當に位置付けることも、本研究領域に与えられた重要な課題である。

【キーワード】

中国文明：紀元前2千年紀前半に黄河中流域に勃興した青銅器時代文明。河南省二里頭遺跡を放射の中心として、様々な文明要素が中国各地に波及し、「中国的世界」が形成された。

【領域設定期間と研究経費】

令和2年度－6年度 550,700 千円

【ホームページ等】

[https:// www.chugokubunmei.jp/](https://www.chugokubunmei.jp/)